

金目川と鈴川に挟まれた「金田地区」は、昔から金目川の水を利用し、水田耕作が続けられてきました。その一方、大雨による堤防の決壊が、洪水の被害をもたらしてきました。その歴史や現況を既記載事項も交えて編集いたしました。

金田地区は洪水の危険度が高く、これまでに被害を重ねているとの指摘を受けました。確かに、台風の接近、大雨等で小学校避難場所が開設され、19年には多くの地元民が避難しました。幸いなことに、堤防の溢水はありませんでした。標高の低い箇所での道路冠水は散見されていましたが、床下への浸水被害は聞いていません。

私がこの地に住まい、約40年を経過しますが河川の破堤による洪水被害を受けた経験はありません。近年の異常気象がもたらす台風の大型化や豪雨に遭遇するにつけ、過去の経験則が通用するとは限りません。

金田地区の地形特徴は西部に高く(13m超)、東部鈴川方面(8m台)に低くなり、北部(10m)よりも南部、特に長瀬自治会に属する地域が標高最低地域(6m台)となっています。大規模な破堤による洪水を考えると、標高の高い飯島付近での破堤は、洪水の水流として金田地区の東、南部方面に行き着くと想定されます。そのうえ、金目川、鈴川には約3mの堤防が築かれています。

地元の方々からは、昭和13年の大洪水が近時の大災害だったと聞いています。

金目川は元禄の大地震により、川の瀬が高くなり天井川となっています。農業用水の取水には有効ですが、ひとたび破堤すると被害は甚大となるリスクを負っています。江戸時代に金目川は、洪水被害と農業生産とを「暴れ川、命の川」と称されていたようです。

金田地区で金目川と鈴川の合流点に近い長瀬自治会では標高が低く(6m台)、揚水ポンプ場の設置、家屋土台のかさ上げ、大雨予報に合わせ車を安全な場所に移動させるなどの措置がされると聞いています。

近年の自然災害を考えると、新しい街づくりに「水防上の経験、知恵」を生かすことは、安全な生活を保持し確立する点から重要な課題と考えられます。

水防へのこれまでに取られた「控え土手」、「新幹線高架敷設」、「地域住民への防災啓発」等、風水害から地域住民の生活を守る手立てと考え、資料を添えます。

● 平塚市民俗調査報告書 4 — 金目・金田 — より

○ 予兆（稲作中心の寺田縄です、天候への予兆は農作業に不可欠なものでした）

- ・ 虹が川を渡ると、川マタギといって、天気がかすれる
- ・ 雷さんが鳴りながら海のほうに降りると、天候はよくなる
- ・ 「春海、秋山」といって、春に海が晴れてくると、雨が降らない。
秋に山が晴れてくると、雨が降らない。
- ・ 上空にうろこ雲ができると、明日は風が吹く
- ・ 夏場にタッカ（入道雲）が立つと、三日以内に雨が降る
- ・ 西、曇れば雨になり、東、曇れば風となる
- ・ 東の方に虹が立つと、大雨になる
- ・ 東から雷がくると、天気がある
- ・ 富士山の上に雲がかかると、必ず西風が吹く
- ・ 大山がすっきりしているときは、雨が降らない
- ・ 冬場、富士山に雲がかかると、西の風が強くなる
- ・ 夕焼けがきれいだと、天気になる
- ・ 夕方に西が青空であると、翌日は天気になる
- ・ 月にかさがかかると、雨になる
- ・ 星の出る翌日は、天気になる
- ・ 猫が顔をこすったり、なめたりすると、翌日は雨になる
- ・ 猫が耳をこすると、雨が降る
- ・ スズメが騒ぐと、天気が変わる
- ・ カエルが騒がしく鳴くと、雨が降る
- ・ 夕方にアブやハチが出ると、天気が変わる

* 本調査は、平塚市を地域区分し悉皆調査の結果を「平塚市民俗調査報告書」として纏められ、1984年には「金目・金田編」として刊行されました。

* 自然災害については記されていませんでした。

● 金目川の筋替え（堀替え・流路の変更）

- 1703（元禄16）年11月：元禄関東地震
川瀬が高くなり、降水量が増えると、金目川の水があふれ、洪水を繰り返した。
- 1704（宝永元）年6月：金目川満水
- 1705（宝永2）年6月：金目川満水
乍恐口上書を以奉願候御事
「相州金目大堤并川通所々堤之儀、・・・」
「所々堤押切百姓家居迄水押上、殊夜半儀有故農具等押流、雑穀くさらかし、其上田地石砂入、又者水腐二而当分ち及湯命申候、・・・」
「此村々所々堤下二御座候故、何連之堤押切申候而も田畑損仕候、何とそ此度川通り所々堤、丈夫二御普請被仰付被下候様二奉願候、」
「右之堤年々川幅せまく御座候、御見分之上、水当り之所川幅御広ク被遊被下候様二奉願候、地震以来川瀬大分高罷成、少シ之水二も堤押切申候」

＜平塚市史4 村と水利 金目川＞

- 1706（宝永3）年2月 金目川筋替え・・・幕府による改修（御普請）
入野、長持、南原村の間をほぼ直線的に長830間（1494m）余、川幅50～25、6間（90～24m）余りに掘り替えるもので、現在の流路となっています。
入野村：「金目川 村西ヲ流ル（幅二十五間）昔ハ村ノ中程ヲ 斜ニ疏通シ 巽方ニテ 鈴川ニ合セシガ 屢水溢セシヲ以テ 宝永三年 命アリテ 今ノ如ク堀替レリ」
＜風土記稿＞
- 1707（宝永4）年 11月23日 富士山噴火（宝永の噴火）
火山灰は砂降りと表現されるように、田畑、家屋にも降り積もり、北金目地域では23～26cmほどの火山灰が積もったという記録があります。

農業用水路や金目川を流れた火山灰は、川底に堆積し排水が悪くなり「田畑の儀は申すに及ばず、百姓居家迄常々水湛え、住居なり難く」なる状況になりました。

金目川、鈴川、玉川に降った火山灰（砂降り）が合流点に堆積し、ダム状になり水が溜まり、入野、長持、豊田本郷、小嶺、宮下、平等寺、打間木の7ヶ村の田畑・家屋が浸水し、往来に船を使わねばならない状態になりました。

幕府は、諸河川の川濶いや金目川、玉川の筋替えを実施し、現在の川筋が完成しました。

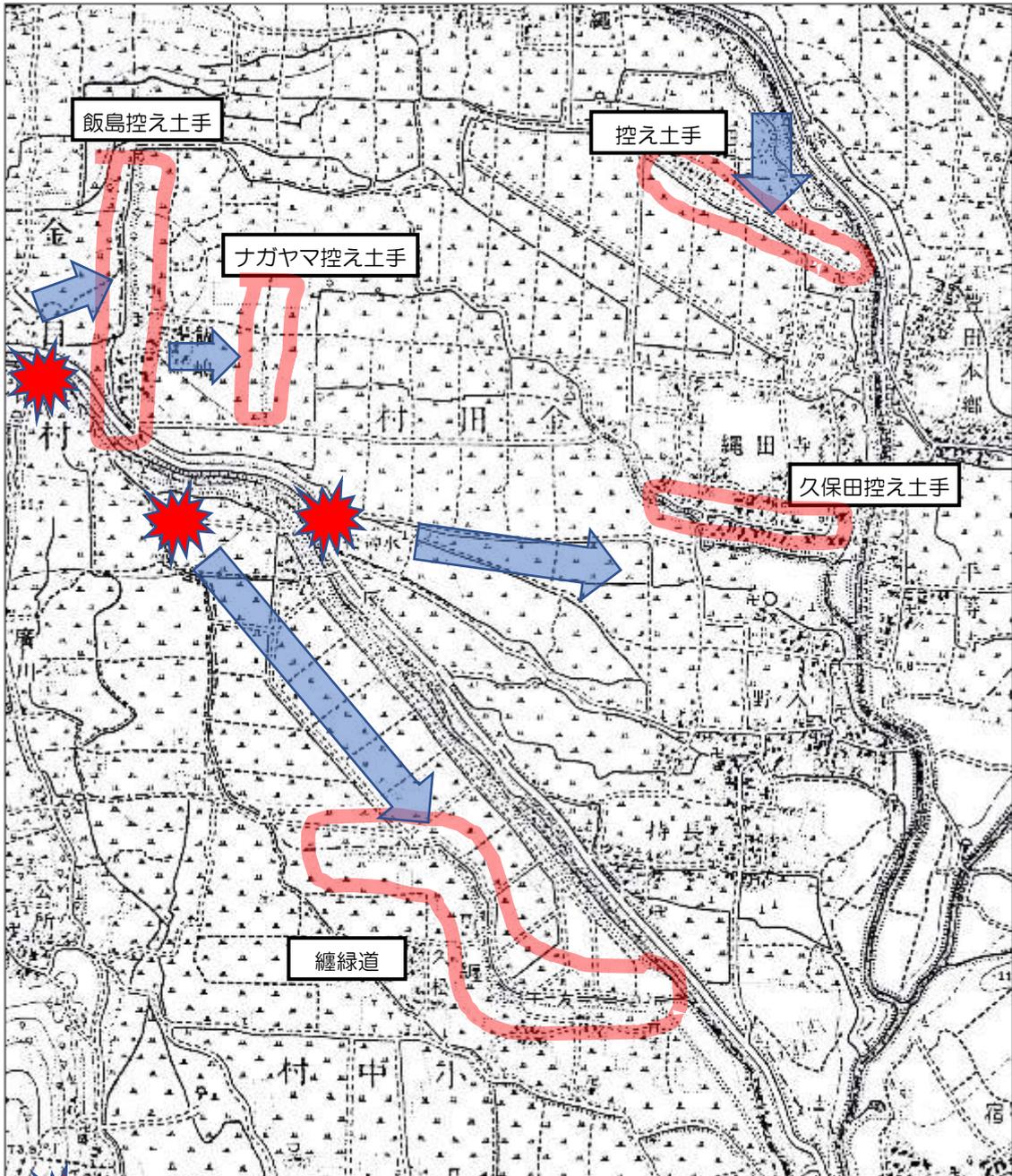
＜公民館講座「ヘルシーウォーク」資料より＞

● 控え土手の構築

(洪水から集落・田畑を守るため、平地に築かれた水防の土手)

明治39年 地形図 金田地区

★現在の公民館所在地



★ 金目川で、決壊しやすい箇所（過去の決壊箇所）

→ 氾濫流の流路。 控え土手で水流を遮る

「控え土手」構築の目的は、決壊による氾濫流を食い止め、集落や水田を保守する。
いずれも、残された資料がなく、詳細な規模等は判明しません。

- 飯島 < 大部分が現存 >
- 飯島と寺田縄境 < ナガヤマ >
規模などの記録がありません。耕地整理の時に消滅したそうです。
- 寺田縄と岡崎境
明治期 金田村村長吉川長五郎氏 構築。現在は撤去され、道路となっています。
- 寺田縄と入野境 < 字久保田水控堤 > 現在は撤去され、住宅となっています。
敷 三間（5.4m）、馬踏 六尺（1.8m）、高 五尺（1.5m）
長 貳百三拾五間（425.4m）
「控堤居村際二有之低地二而、満水之節者水甚、種穀夫食込水冠而難渋仕候」
＜相模国大住郡入野村明細帳＞
- 長持と纏（纏の緑道） < 改修され、現在は散歩道 >
「金目川控堤飛地二有之当村ち卯（東）ノ方二当り申候
敷 六間（10.8m）、馬踏 八尺（2.4m）、高 九尺（2.7m）
長 貳百八拾六間（517.6m）ニ御座候」
＜「松延村地誌取調書上帳」天保五年（1834）平塚市史3＞

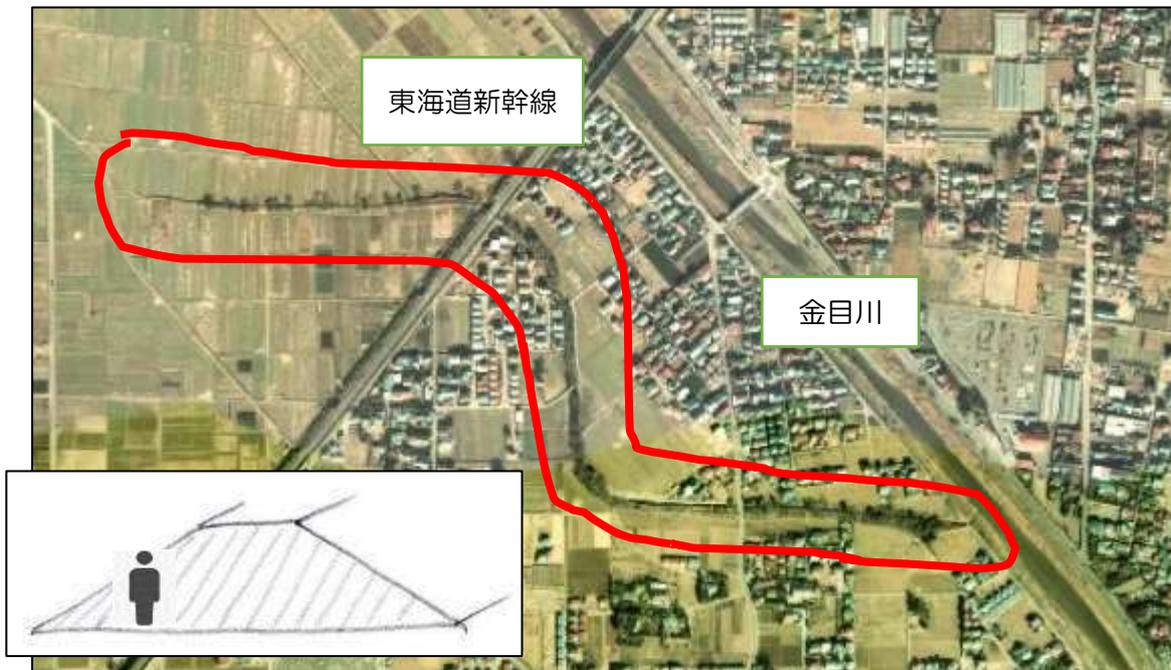


久保田 控え土手



(馬踏 1.8 高 1.5 敷 5.4 長 425.4)

纏緑道 (控え土手)



(馬踏 2.4 高 2.7 敷 10.8 長 517.6)

1974~78 (昭和49~53) 年<「地盤サポートマップ」 ジャパンホームシールド (株) >
<公民館講座「ヘルシーウォーク」資料より>

● 1938（昭和13）年 横浜貿易新報記事より 金田地区水害報道

○ 9月3日付の紙面より



1 深さ1米の濁湖 四ヶ村水浸し 耕地の被害前回より甚大

金目・岡崎・金田・豊田の各村は、金目川の下大槻堤防が破損して一時土屋方面へ流れたが、再び本流へ逆流して南金目から左岸に決壊したる為、前記四村の大部分は、人家といわず耕地といわず濁流に浸った所へ、鈴川・大根・玉川の各河が数十ヶ所堤防破損した為、更に大根・岡崎の両村に広がって、三百町歩に亘って一米前後の水深で一大濁湖をつくらせている。前回の水害には之が被害地九百数十町歩に及んでいたが、今度はこれ以上に及んでいる。

2 水田中を貫く諸川 川底が陸より高い 分水路の計画一步前

中郡金目村一帯は本県唯一の農耕地帯であるが、従来年々風水害の都度玉川の河底が高いため氾濫の場合には減水までには十日前後有していた。県農地課では之が災いを除くため、玉川の上愛甲恩曾川を経て相模川へ約一里の水路を作って分水すべく五、六十万円の予算で計画している。一方玉川の下流に当たる菅城沼島村長他数名も二日県耕地課に前記対策方を陳情した。一方金目川も玉川の二里に至る天井川同様川底が平地よりぐっと上がっているため川渌が必要とされている。

平塚地方

見渡す限り水の中 金目川の大氾濫
湘南地方の被害甚大

湘南地方の大暴風雨の被害は最も激甚を極め、工場・住宅・学校等大建物の被害は二十万円を突破し、農作物の被害は畑作水田等、平塚署管内だけでも十数万円に達している。ことに金目川の氾濫は惨状を極め、金目橋は半分を流出し、金目村地先き大マの金目県道は120間が損潰して、見渡す限りの水田は一面水浸しとなった。同村では、消防組織農民千余名が総出動して、欠潰箇所の堤防の応急修理に活動している

○ 昭和13年9月7日発行の紙面 金目川の濁流 減水を待つて作業続行

平塚地方の被害甚大

見渡す限り水の中 金目川の大氾濫

湘南地方の被害甚大

湘南地方の大暴風雨の被害は最も激甚を極め、工場・住宅・学校等大建物の被害は二十万円を突破し、農作物の被害は畑作水田等、平塚署管内だけでも十数万円に達している。ことに金目川の氾濫は惨状を極め、金目橋は半分を流出し、金目村地先き大マの金目県道は120間が損潰して、見渡す限りの水田は一面水浸しとなった。同村では、消防組織農民千余名が総出動して、欠潰箇所の堤防の応急修理に活動している



金目川の濁流

減水を待つて作業続行

一日の豪雨で決壊した金目川の氾濫箇所堰き止めに、連日六、七百名の農夫、消防夫出動しているが、五日の豪雨で又も四、五米増水したので、堰き止めた土囊の上を濁流が溢れ中央の廿五米は水深二米となって水倉も土囊も押し流され、方法がつかぬので減水を待つて堰き止める作業を行うこととなった。

一日の豪雨で決壊した金目川の氾濫箇所堰き止めに、連日六、七百名の農夫、消防夫出動しているが、五日の豪雨で又も四、五米増水したので、堰き止めた土囊の上を濁流が溢れ中央の廿五米は水深二米となって水倉も土囊も押し流され、方法がつかぬので減水を待つて堰き止める作業を行うこととなった。

● 金目川の堤防修復の様子



(金田小学校創立
100周年記念誌
より)

昭和13年の
台風での 神奈
中バス停 県立
平塚養護学校前
付近での作業の
様子といわれて
います。

● 洪水の記憶 (金田地区の方々)

- 金旭中の土手がよく切れた。「荒田」と呼ばれた。
- 台風が接近すれば、集落の人たちは金目川の見回りに出かけた。
- 大雨が降れば、集落総出で金目川の土手を見に行き、時には、しいの木の枝を切り、「ナガシ」として土手の削れるのを防ぎ、堤防を守った。
- 飯島は金目川が切れても被害は及ばなかった。しかし、大雨が降ると総員で金目川の水を見に出た。
- 半鐘がなる。警戒の時には「ミツバン」が打たれ、堤防が切れそうなときには「連打」される。金目川の水が増え、年に一、二回は警戒に当たった。時には、禪を巻き、蓑笠つけて流れに入り「ナガシ」を押さえにかかった。男達が総出で当たり、家には女・子供だけ、子供たちは半鐘がなると、怖さに震えていた。
- 作業は、急遽「ナガシ」を作り、丸太、のこぎり、かけやを持ち寄り、2・3人で「マワシブチ」で丸太を打つ。針金、縄をよじって押さえる。金目川は川底が高く、決壊すると被害は大きくなる。
- 飯島は名の通り「島」で洪水被害はなかった。金目川の上流での決壊は、片岡と分ける「控え土手」があり、洪水から守られていた。上流が決壊したときの水の流れは、「控え土手」の外側を流れ、岡崎境を回り、鈴川の土手に沿って下へと流れた。
- 寺田縄の東橋付近の排水路は、水が出易く、溢水もする。時には、日枝神社に避難することもあった。流れを暗渠にして、1m管を埋設してあるが、その太さは鈴川まで延長されておらず、下流部が狭くなっている。大雨のときの排水能力が低く心配だ。
- 寺田縄の北部は遊水池的なところであり、水がつきやすい。

- 悪いけれども、金目川の上流が切れるときは、下流の金田には影響が少なく、助かった。こんなことを言っはいけないのだが、金目川の上流が切れると、水量が減り安心した。
- 昭和13年には、金目川の「御所堤」(金目)と「オオマガリ」(金田)が同時に切れた。
- 寺田縄に住んでいたが、鈴川の北側から高さ50cmぐらいの水が、波のように丸まってきた。子ども時分だったので、タイヤに乗って遊んだが流されてしまった。あの時はすごかった。駐在さんの前は、子供では背が立たないくらい深くなった。
- 川の水が一杯になり、金目川と鈴川が切れ、飯島を除いた集落に水が溜り、特に長瀬に水が集まった。
- 金目川の水の流れはものすごく早く、人が歩くより早かった。荷車も流され、まるで津波のようだった。場所によっては床下浸水もあったが、ほとんどの家が床上浸水となった。
- 長瀬地域は、金目川と鈴川の三角地帯であり、当時は排水ポンプの設置がなく、水の逃げ道がなく、排水されず、汚水が溜まってしまった。昭和13年の洪水の時には、池のようになっていたところもある。
- 金目川が切れ、水は東に流れ、別北の満願寺付近に至り、鈴川の右岸も切れ寺田縄に流れ込んだ。
- 寺田縄の東では、深さは障子の三段目位まで、中には、たらいで遊ぶ子供もいた。金田地区は四日間ぐらい水につかり、噂話では、長瀬の小川医院付近の土手を切り鈴川に流した。そのためか、水の引きが良かった。
- 入野の川崎町の低いところには、風呂桶が流れた。
- 牛を色氏橋の欄干に繋いだ。
- 入野には、水がじわじわと来た。水がどこまで来るか不安だった。
- 洪水後の復旧が遅れ、バス停が変更されて、決壊区間をはさんで折り返した。この状態が半年間くらい続いた。入野は、バスの迂回路となった。
- 伊勢原道は船で行き来した。
- 土手が切れるのは、水が増える時ではなく引く時だった。お前のところが切れるから、畳をもってこい(堤防を守るために流れに入れる。)と頑強にいう人、もう遅いやという人がいたりした。
- 水が引いた後、家の中のヘドロをかき出すのが、大変だった。
- 洪水後は、村中で土手や田畑の復旧に当たるが、釣りにくる者がいて頭にきた覚えがある。
- 洪水後、米の収量は、1反で4俵ほどしか収穫できず、被害が大きかった。
- 入野の八坂神社の屋根と金目川は、同じ高さ。
- 入野の八坂神社、福田寺の屋根と天王道の一本松(水神さん)と、同じ高さ。
- 洪水で苦労したのでその後、土台を高くし水に備える家が増えた。

<以上は昭和13年の洪水やその時以外の洪水についての体験談を記しました。金田地区歴史再発見事業の活動委員会が編集した「私たちの住む町 金田」に収録されています>

金田地区は、奈良時代に「川相郷」とされていた時があります。金目川と鈴川の2本の河川に挟まれた郷とされていたのでしょ。両河川は水田耕作のために有益でしたが半面、洪水の被害に悩まされ、たびたび河川改修が施されて今日に至っています。

<「私たちの住むまち金田」より>

● 長瀬地域に排水ポンプ場設置



- 長持ポンプ場 1996年9月使用開始
- ポンプアップして鈴川に放流する
- 標高6m台（金田地区内では低い地点）：蓋掛けをし、道路化した排水路からの排水と道路冠水を放流する

<公民館講座「ヘルシーウォーク」資料より>

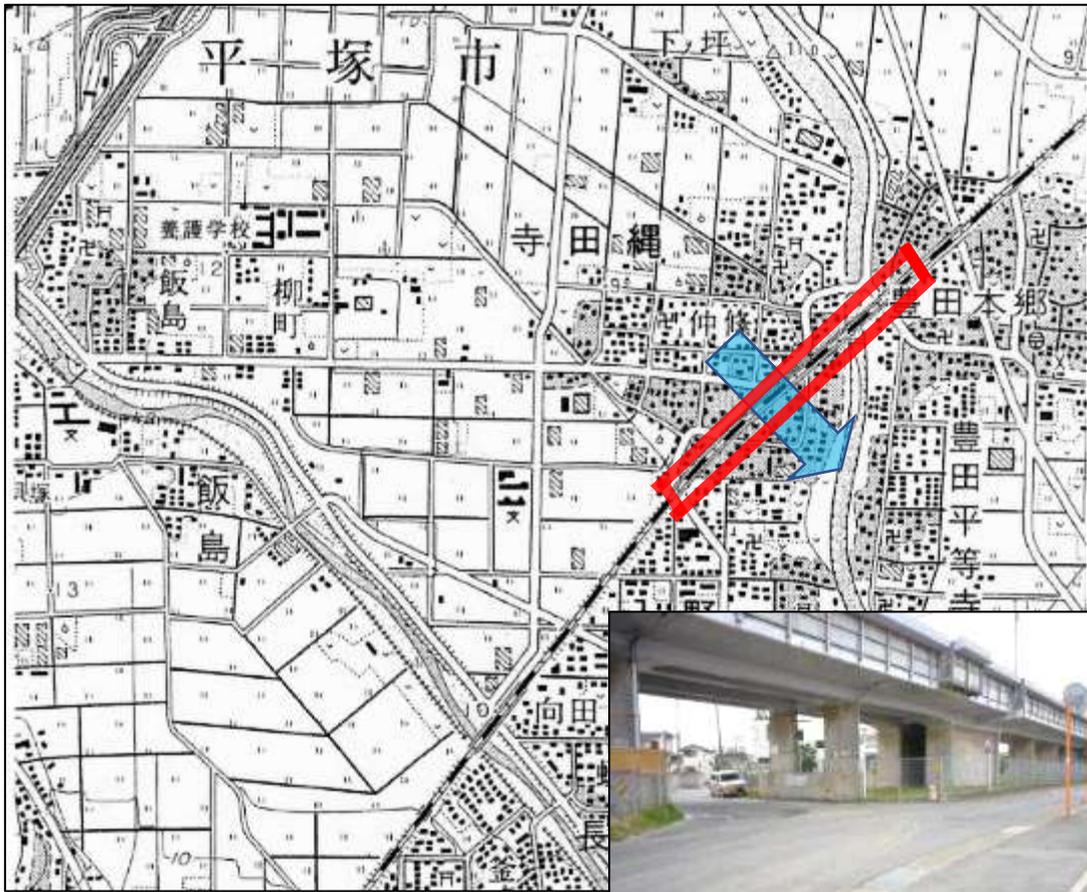
● 鈴川土手にコンクリート壁（パラペット）設置



- パラペット： 堤防上の立ち上がり
- 鈴川の溢水を予防するため、コンクリートでの堤防のかさ上げ（堤防の補強）
- 下之宮橋より下流、堤防上に設置。写真は右岸堤防

<公民館講座「ヘルシーウォーク」資料より>

● 東海道新幹線 高架橋方式 (東橋 ~ 公民館へのガード)



新幹線を金田地区に敷設するにあたって、
築堤方式だと堤防と同じように洪水の流路を妨げ、滞留する恐れを防ぐため、地域の強い要望で高架方式を実現させた。高架区間を金目川までとして交渉されました。

図の赤い部分が採用された高架方式。要望の金目川までは至りませんでした。洪水の水流を高架部分で流出させる策は取られました。

この付近は、金田地区の寺田縄地域で標高の低い（8m台）所となっています。

<公民館講座「ヘルシーウォーク」資料より>

● 寺田縄地域のハザードマップを読む (最大規模の降水時 396mm/24H)

○ 地域の浸水深:

浸水深 3m未満の地域:

浸水深 5m未満の地域:

○ 浸水継続時間:

○ 金田小学校緊急避難場所への避難

金田小学校緊急避難場所周辺 浸水深 1.8m (小学校水準値 10.08m)

- 問題: 金田小学校: 1階 水没・体育館への避難は不安

古川排水・浸水深5m未満

- 三七起橋付近・あさつゆ広場への道
- 西棲橋付近・ソーレへの道
- 富士見橋付近・駐在所付近・入野への道

- 避難ルート: 浸水深5m未満の地を、回避する

金田小学校への避難ルート: 登校班ルートは困難

- 対策: 警戒レベル3の発令・避難所開設の報を受けたら **一刻も早く避難する**

風雨の強い中、浸水深・膝まで: 徒歩での避難は困難

浸水深・50cm: 車での避難は困難(エンジン停止のおそれ)

○ 避難行動の考え方

3m未満の浸水深: 自宅の1階は 水没のおそれあり、2階以上へ避難する

- 新型コロナウイルス対策として、避難所の「3密」を避ける
- 避難所へ避難せず、安全なところにある親戚、知人、近隣を頼る

○ ハザードマップの考察

- 地域の標高を知る: 水準点、国土地理院標高・・・資料添付

- ① 地形の状況(標高値)の把握: 標高の低い所の浸水深は深くなる
- ② 堤防の越水場所、決壊場所などの危険個所を過去例から推定する
- ③ 氾濫流の流下傾向: 堤防決壊後、氾濫流は川の流れるように押し寄せるか?
- ④ 堤防決壊、氾濫流の結果: マップの浸水深値となるのか、もっと深度が増すか?
- ⑤ 金目川、鈴川の堤防の存在: 流出先がない(特に、扇端部になる長瀬地域)
- ⑤ バックウォーターの危惧: 排水路の流出口付近
- ⑥ 内水ハザードマップを参照する: 市全域 50mm/1Hの降水

<寺田縄防災会議資料>

● 地区の石碑

• 石碑「水神の塔」 入野地域

『用水の水が涸れぬよう、また洪水が起きないように祈ったという。

八坂神社（旧名・牛頭天王社）の祭礼日に祝詞をあげる』〈平塚の石仏 金田地区編〉

- 金目川のオオマガリと称せられ、堤防の決壊と洪水が多発したと伝えられている堤防脇に建立されています。

• 石碑「水神」 寺田縄地域

『川に近いところで、水害に悩まされていたために祀ったという。もとは金目川の旧河道に面していたという。最近まで年に一回、4～5軒で水神講をおこなっていた』

〈平塚の石仏 金田地区編〉

- 旧来の地から移され、現在は、古川排水路脇に祀られている。金目川の旧河道脇に建立されていたと聞いています。

● 金目川の筋替え前の旧河道を考える (金田地区の字名)



- 水神橋の上流、通称オオマガリの北付近から天王道（八坂神社の旧名、牛頭天王社に因む）を抜け、下之宮橋付近で鈴川に合流していました。<もっと蛇行していたと思われます>
- 水神さんが祀られ、字名にある上・下砂原、塔越、大り越等の字名に古い金目川の名残があると云われています。
- 字名の「崩し」は災害を意味し、付近に水神さんを祀っているのは、金目川の決壊場所を示しているようです。天王道が旧河道と指摘されていますが、古い川の流れに沿う金目川の慣性が想起されます。
- 金目川と鈴川の合流点付近に「古屋敷」という字名があります。むかし集落がありましたが、鈴川が氾濫するので、300年ほど前、土地の高い西の方に移転したといわれています。金目川と鈴川の合流点であったと思われます。

● 地域防災についての対応

単位自治会（飯島、寺田縄、入野、長持、長瀬自治会） ごとに対応がなされている

例：寺田縄自治会

- ・ 積極的に防災活動に取り組む「プロモート」を募集し、防災会メンバーとした
- ・ 現在は16名が活動中
- ・ 月例の定例会実施
- ・ プロモートの活動
 - ホットライン 警戒レベル3の発令 → 分担で自治会組長に発令を電話で伝達
→ 各組長を介して、自治会員全員（訳800名）へ電話で伝達
 - 対・要支援者 警戒レベル3の発令 → 分担の要支援者へ電話で伝達し
安否確認・避難行動の方法を確認
 - 面談の実施（生活状況・身体状況等の変化を把握等確認、記録化する）
- 地域防災訓練： 参加者 防災会員、寺田縄の住民
- 防災活動の講習会開催・参加
- 防災まち歩き
- ・ 全戸配布の「防災ニュース」発行
- ・ 公民館 防災講座の開催
 - 金田地区住民の希望参加
 - プロジェクターを使用しての講座
 - 内容 洪水ハザードマップの見方
 - 金田地区の地形の特徴
 - 金目川で過去に破堤した個所の確認
 - 洪水対策の啓発

開催

- ・ 公民館地域巡検の開催
 - ヘルシーウォーク +
 - 内容 金目川流域見学
 - 控え土手（纏緑道・飯島）現地見学